

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00247

研究課題名（和文）油絵具を用いた夜景絵画制作法の研究：アトキンソン・グリムショーの作品を基盤として

研究課題名（英文）A Study on the Method of Night Scene Painting by Oil Paint: Based on John Atkinson Grimshaw's Works

研究代表者

株田 昌彦（Kabuta, Masahiko）

宇都宮大学・共同教育学部・准教授

研究者番号：50515971

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀イギリスの画家であるアトキンソン・グリムショーの夜景絵画について技法的特徴を明らかにした。

1860年代の初期作品に補色対比やインプリトゥーラ等の技法を駆使していることを確認し、それが1870年代の夜景絵画に応用されていることを明らかにした。これらの内容を学会論文2編として発表した。特に先行研究で指摘されていたコーパルワニスの使用の可能性について、サンプル制作を用いることで証明すると共に、この伝統的な画材の可能性について指摘した。また、得られた知見を基に実験制作を行い、油絵具で夜景絵画を描く際のポイントを制作手順の観点から示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

油絵具を用いた夜景絵画の描画法について、制作過程に焦点を当てた技法書は少ない。本研究では、グリムショーの作品の分析を踏まえ、描画のポイントを実践を示すことができた。これは、第三者が夜景絵画の制作を行う際の一つの参考例となりうると思われる。

本研究代表者が調べた限り、グリムショーの夜景作品を収蔵する美術館やギャラリーは少なく、当然認知度も低いといえる。本研究では、我が国におけるグリムショーの絵画の魅力学会論文を通して発信することができた。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the technical characteristics of night scene paintings by Atkinson Grimshaw, a British painter the 19th-century.

In this study, we confirmed that there was a technique complementary color and imprimatur in the early works of the 1860's and specified those techniques are also within night scene paintings of the 1870's. Those things are arranged as two academic papers. In particular, the possibility of using copal varnish, which had been pointed out in previous studies, was proved by using sample production, and the utility of this traditional painting medium was showed. In addition, a sample work was painted based on the knowledge gained by examination. Therefore some points for painting night scenes with oil paints were shown from point of the processes.

研究分野：絵画技法

キーワード：コーパルワニス 補色対比 インプリマトゥーラ 消失遠近法 空気遠近法

1. 研究開始当初の背景

グリムショー作品の最大の特徴は夜景にある。情趣豊かな彼の作品は現在でも大手オークションに出品され人気を博している。これらの絵画の多くは油絵具で描かれており、彼の故郷であるリーズの街並みや田舎の小道、当時世界有数の大都市として発展したロンドンも題材となった。それはガス灯が照明器具として普及し、夜の風景が劇的に変化した当時のイギリスの世相を反映している。

これまでグリムショーの作品を大々的に焦点を当てた先行研究は少ない。先行研究では彼の画業の全貌はおおよそ明らかになっているが、油彩画の制作法からの言及は少ない。唯一、2012年にロンドンのギルドホール・アート・ギャラリーで開催された彼の大規模な展覧会のカタログの中に記載された「The Artist's Painting Techniques」に集約されているのみである。ここでは主に油彩画制作に関わる主要な素材(画用液、顔料、支持体等)について、個々の作品における使用法の紹介や考察が中心であり、試料を基にした考察はなされていない。本研究では、実見や図版を基に試料を作成し、考察を行った。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は以下の2点である。

(1) グリムショーの夜景絵画における表現と制作上のポイントの明確化

(2) グリムショーの分析を基にした夜景絵画の制作法

(1)について、作品の実見調査を踏まえ制作手順を推測し、画面設定や構成、技法がどのように表現上の特徴を形成しているのかを考察した。目的の(2)では、目的(1)での考察を基に実験制作を行い、油絵具による新たな夜景の制作法を検証した。

日本では、彼の作品を収蔵する美術館やギャラリーは確認されておらず、認知度は低い。そのため、論文の発表を通してグリムショー作品の魅力を発信することも本研究の目的の一つである。

3. 研究の方法

本研究の目的(1)を達成するため、実見経験のあるグリムショー作品を分析対象とした。当初、作品を多く収蔵するイギリスの美術館やギャラリーで調査の予定であったが、新型コロナパンデミックの影響により調査を遂行できなかった。そこで以前に自身で調査した資料をもとに試料作成と考察を行った。ここで特に重要視したのは画用液である。先行研究ではコーパルワニスの使用が推測されている。試料を用いてその仮説を検証すると共に表現上の効果を考察した。

目的(2)に対応する部分として、実験制作を行った。制作を通してグリムショーが使用したとされる画用液の効果や、彼の描画法が現代の風景に当てはめられることができるのか、検証した。

4. 研究成果

研究の二つの目的に則り、以下のとおり分析、考察、実験制作を遂行し、2編の学会論文として纏めた。

(1) 研究の目的(1)について、過去の実見調査の資料および文献を基に考察を行った。グリムショーが作品制作を始めたのは1860年代初頭とされ、夜景絵画は1870年頃から点数が増加し、彼の代名詞となった。そこで本研究者は作品群を黎明期である1860年代の初期作品と、発展期の1870年代の二つの時期に分けて考察した。

その中で60年代の初期作品には後の夜景絵画に繋がる基礎的な技法が存在することを発見した。また、1870年代以降の夜景絵画においてそれらの技法がどのように応用されているかを明らかにした。

実見できた1860年代の初期作品は5点であり、そのうち1点のみが夜景絵画である。これは1869年に制作された、《Autumn Glory: The Old Mill》(図1)であり、70年代以降の夜景絵画への足掛かりとなった作品である。その他の4点は日中の光の設定で、1869年以前に描かれたものである。本研究者は、これら4点に用いられている技法を駆使して《Autumn Glory: The Old Mill》が制作されたことを指摘した。

70年代以降の作品においては、21点を実見しており、そのうち13点が夜景絵画である。中でも都市景観を描いたものや、白黒写真の上に油彩で加筆された作品など、初期作品の技法を踏襲しつつも技術的な展開が見られることを指摘した。具体的な描画法の分析の観点として、次の2点を設定した。

画面構成(構図、遠近法、配色、対象の形式など)

技法(支持体やマチエール、画用液、制作過程など)

以下、本研究で明らかにした具体的な内容を記載する。

画面構成(構図、遠近法、配色、対象の形式など)

初期作品では、《A Mossy Bank》(図3)のように対象物の描写部分の繋ぎ合わせによる構成を

軸としていたが、1860年代の後半である《The Seal of the Covenant》(図4)のように風景を大きくパートとして捉え、空気遠近法を導入している。同様に、克明な描写の前景と後景の柔らかく暈けた部分を対比させて絵画空間を構成する消失遠近法が採用されていた。配色に関して、最初期の作品では固有色に則していたものが、60年代後半では補色を意識した配色が取り入れられた。連動してグレートーンのバリエーションも豊富となった。制作の資料として写真やマジック・ランタンが使用され、克明な描写が実現されていた作例も確認できた。以上のことから、画面構成に関わる70年代における夜景絵画への基礎として、空気遠近法、消失遠近法、補色対比、グレートーン、風景写真をキーワードとして位置づけた。

70年代以降の夜景絵画においては、それら初期の遠近法に加え、線遠近法導入の痕跡を発見した。《Boar Lane Leeds by Lamplight》(図5)では、消失点の位置にピン止めの跡(図6)が見られた。配色では、初期絵画の補色対比を青色として展開していた。灰緑をドミナントカラーに設定し、それと補色の関係にある灰赤紫を下塗りや描画に使用している。加えて人工光源の部分には鮮やかなオレンジを配し、アクセント色としての効果を高めていることを確認した。また、写真の利用については、日中に撮影された白黒風景写真の上から油彩画で加筆し夜景絵画に展開した作品《Manchester》(図7)も見られ、積極的利用の姿勢があることを示した。

技法(支持体やマチエール、画用液、制作過程など)

支持体は、全ての期間において板(パーティクルボードのような)とキャンバスが確認できた。いずれも繊細な描写のため表面が平滑なものが採用された。最初期の作品である《A Dead Linnet》には、インプリマトゥーラを導入した細密描写が見られ、1860年代中盤の作品には白の下塗りに上に色を重ねるラファエル前派の技法も確認された。《Autumn Glory: The Old Mill》ではそれらを併用していた。また、《Autumn Glory: The Old Mill》の枝や幹に見られる液垂れのタッチは高濃度の画用液の使用を裏付けるものであり、70年代以降の夜景絵画にも応用されている。先行研究ではコーパルワニスの使用が推測されている。以上を踏まえ、本研究では初期絵画における特徴的な技法として、インプリマトゥーラ、コーパルワニスをキーワードとして設定した。

70年代以降の夜景絵画においては、描き始めのインプリマトゥーラによる茶褐色の下塗りや灰赤紫による下塗り、白の下地が部分的にまたは作品によって使い分けられていることを発見した。また、《Manchester》では、描き始めに日中に撮影された白黒風景写真の上にインプリマトゥーラによって暗く土台を落とすことで夜景として変換していることを指摘した。画用液については、人工光で輝くショーウィンドウを描写した部分に見られる液垂れのマチエールに着目した。このマチエールの再現(図8)を様々なメディウムで製作し効果を検証した。その結果、マチエールの色や際の表情からコーパルワニスが最も再現性が高かった。その他、地面や水面に映る人工光源の反射光の描写に見られる粒状の盛り上がったタッチも速乾性のコーパルワニスであれば実現が容易であることと指摘した。よって、グリムショーの夜景絵画においてコーパルワニス使用を本研究では結論づけた。また、初期絵画に見られない特徴として、画面内での個々の対象(建物や樹木、人物)を暗褐色の線による形態の描き起こしが確認された。



図1: 《Autumn Glory: The Old Mill》1869年



図2: 《A Dead Linnet》1862-63年



図3 《A Mossy Bank》1861年



図4 《The Seal of the Covenant》1868年



図5 《 Boar Lane Leeds by Lamplight 》 1881年

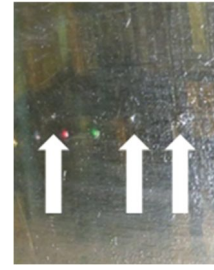


図6 図5の部分 矢印は穴の跡を示す



図7 《 Manchester 》 1888年

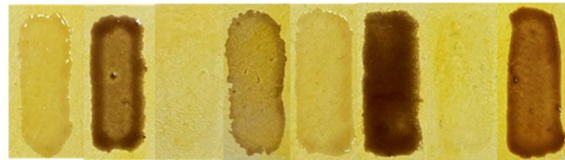


図8 画用液の試料

(2) 研究の目的(2)について

70年代以降のグリムショーの夜景絵画の表現上の特徴について、画面構成(構図,遠近法,配色,対象の形式など)および技法(支持体やマチエール,画用液,制作過程など)の検証の結果を基に実験制作を行った。制作に際して、それぞれの観点に対応する部分は以下の通りである。

写真の導入、下地の効果(灰赤紫、褐色)、ドミナントカラーの導入

平滑な支持体(板)、コーパルワニスの効果(透明性、マチエール)、暗褐色の線の効果

実験制作の行程は(図9)に示している。支持体にはシナベニヤパネルを採用し、ジェッソを数回塗布し、紙やすりで研磨したものを採用した。描写対象として写真は本研究者自身が撮影したロンドン市街の夜景写真を用いた。下描きについては、前述の《 Boar Lane Leeds by Lamplight 》で鉛筆の線が確認できており、この実験制作においてもそれに倣い鉛筆を用いた。

下塗りは、後から重ねるドミナントカラーの灰緑の補色として灰赤紫の箇所(主に空)とインプリマトゥーラに通じるような褐色の部分(樹木や建物)に大きく分けて塗布した。その後建物の形態の抜き出しとして、暗褐色の線による抜き出しを行った。これらの描画にはコーパルワニスの主成分のメディウムを用い、高い透明性を生かした下塗りの色の効果を実証した。特に空の部分においては、グリムショーの作品に通底する表現を実現できた。しかし、暗褐色の線による形態の抜き出しについては、動勢が欠如することになり、課題が残る結果となった。

今回の考察を踏まえ、夜景絵画を制作する上で注目するのが《Manchester》である。日中撮影された白黒の風景写真を夜景絵画に変換する手法を参考とし、今後は油彩による現代の夜景絵画制作のための実験制作を進める。

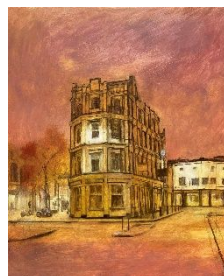
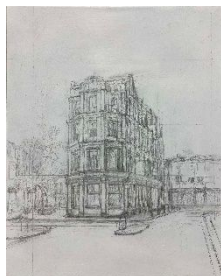


図9: 実験制作の制作過程

図20: 実験制作 完成図

図版写真は全て本研究者が撮影し、収蔵先の許可を得ている。

参考文献: Jane Sellars, 2011, "Atkinson Grimshaw Painter of Moonlight"
The Mercer Art Gallery, Harrogate Borough Council

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 株田昌彦 | 4. 巻 54 |
| 2. 論文標題 ジョン・アトキンソン・グリムショーの夜景絵画における描画法 - 1860年代の作品における分析から - | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 美術教育学研究 | 6. 最初と最後の頁 81-88 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19008/uaesj.54.81 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 株田昌彦 | 4. 巻 55 |
| 2. 論文標題 ジョン・アトキンソン・グリムショーの夜景絵画における描画法 - 1870-年代以降の作品に見られる特徴 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 美術教育学研究 | 6. 最初と最後の頁 97-104 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|